



日本植物分類学会  
ニュースレター

No. 67

Nov. 2017

今号のトピックス

12/16 (土) 大阪学院大学にて講演会が開催されます→ 3 ページ  
3/7 ~ 3/10 に行われる金沢大会の詳細があります→ 5 ページ  
会費納入は 12 月末が期限です。2018 年度より一般会員 7,000 円、  
学生会員 3,000 円となりますのでご注意ください→ 12 ページ

目 次

諸報告

2017 年度第 3 回メール評議員会議事抄録	2
2017 年度野外研修会 (三重県菅島・答志島) の 期間短縮のお詫び	2

お知らせ

2017 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ	3
日本植物分類学会第 17 回大会 (金沢) および 2018 年度総会のご案内	5

書評

日本産ジュラ紀の植物化石図鑑— 来馬型植物群 —	10
水辺の樹木誌	11
会費変更のお知らせと会費納入のお願い	12
会員消息	12

## 諸報告

### 2017年度第3回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 田中 伸幸

2017年11月2日～2017年11月15日に2017年度第3回メール評議員会が開催されました。これは、先日の第2回メール評議員会で、「日本植物分類学会の和文誌『分類』と植物地理・分類学会誌『植物地理・分類研究』を統合し、継続誌名を『植物地理・分類研究』とする。」という第2号議案を巻号引き継ぎを含めてご審議の上、ご承認をいただき、ニュースレターでも会長が説明したところではございますが、議案に巻号引き継ぎが明記されていなかったため、わかりにくいとご指摘がありました。そこで、巻号の引き継ぎを別に明記した追加議案をご提案し、再度承認をご審議いただいたものです。以下に、2017年度第3回メール評議員会の議事抄録を報告いたします。

開催日時：2017年11月2日～2017年11月15日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

#### 議長選出

慣例にしたがい伊藤元己会長を議長とすることに反対はありませんでした。

#### 審議事項

【議案（原案）】2018年度からの日本植物分類学会の和文誌『植物地理・分類研究（The Journal of Phytogeography and Taxonomy）』は、現在、植物地理・分類学会が発行している『植物地理・分類研究』の巻号を引継ぎ、第66巻1号から始める。

#### 審議結果

議案については、審議の結果、それぞれの雑誌の開始、終了の時期を明記した方がわかりやすいというご意見から、年月を入れた修正を経た後、以下の修正議案を最終議案として承認多数で可決されました。

【議案（修正）】2018年4月からの日本植物分類学会の和文誌『植物地理・分類研究（The Journal of Phytogeography and Taxonomy）』は、植物地理・分類学会が2018年3月まで発行する『植物地理・分類研究』の巻号を引継ぎ、第66巻1号から始める。

審議結果【承認13票、非承認0票、白票0票】

※委任状はありませんでした。

本メール評議員会の議事録署名人として村上哲明氏と海老原淳氏が選出されました。

### 2017年度野外研修会（三重県菅島・答志島）の期間短縮のお詫び

野外研修会担当委員 西野 貴子

9月15日から17日に、三重県鳥羽市の菅島・答志島にて予定しておりました2017年野外研修会は、残念ながら台風18号の接近のため、急遽1泊2日に短縮して行われました。

今回、主催いただいた山脇和也氏、福田知子氏には、秋の研修会は台風の恐れがあるとご心配されておられたところ、無理を押ししてお引き受けいただいた経緯がありました。念入りにご準備いただいたにもかかわらず、それがまさかの台風来襲となり、チャーター船や宿泊の変更をはじめ、東奔西走で緊急対応の旅程にアレンジいただきました。予定の半分の日程となりましたが、短縮したとは思えない充実した時間を過ごすことができ、また、名残り惜しくも島を後に揺られた伊勢湾の鈍色も一興で印象深いものでした。詳しくは次号に掲載される報告をお楽しみにお待ちください。

何はともあれ、最善を尽くして主催いただきました山脇、福田両氏と、そして台風にもかかわらずキャンセルせず、急な予定短縮をご寛恕くださいました参加者の皆さまに心より御礼申し上げます。

今回、主催いただきました山脇、福田両氏からメッセージをいただきました。

「東北や九州などをはじめ、遠くから参加して下さった方がいらっしやったにも関わらず、研修会の日程が実質、半分になってしまったことにつき、主催者側としてお詫び申し上げます。これに懲りず今後の野外研修会にもご参加よろしく願いいたします。(福田・山脇)。」

## お知らせ

### 2017年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 布施 静香

2017年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催いたします。今回は、今年度ご定年を迎えられる角野先生と邑田先生をはじめ5名の先生方にご講演いただきます。皆様お誘いあわせの上、ぜひご参加ください。なお、会場は大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただきます。

【日時】2017年12月16日(土) 午前10時～午後4時50分

#### 【プログラム】

- 10:00-10:05 ご挨拶 伊藤 元己 (会長)
- 10:05-11:05 永益 英敏 「学名の読み方・綴り方—学名のあれこれ入門編」
- 11:10-12:10 綿野 泰行 「ハイマツとキタゴヨウ：交雑を通じた遺伝子の種間での交換」  
(12:10-13:25 昼食)
- 13:25-14:25 木下 栄一郎 「植物の生活史研究—生命表の利用」
- 14:30-15:30 邑田 仁 「ヒマラヤ造山運動とテンナンショウ属の分化」
- 15:40-16:40 角野 康郎 「日本の水草研究はどこまで進んだか」
- 16:45-16:50 ご挨拶 林 一彦

【講演会場】大阪学院大学 2号館地下1階 2号教室 (02-B1-02 教室)

〒564-8511 大阪府吹田市岸辺南2丁目36番1号 (電話：06-6381-8434)

#### 【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅、阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩5分。

交通アクセス <http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/campus/access.html>

キャンパスマップ <http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/campus/index.html>

## 【その他】

事前の参加申込は不要です。直接会場へお越しください。参加費は無料ですが、お茶代として1人100円のご協力をお願いします。

また講演会終了後、大阪学院大学職員食堂（17号1階）で懇親会を行います。懇親会の参加費は4,000円（院生・学部学生には割引あり）です。参加を希望される方は準備の都合がありますので、できるだけ事前に [fuse\\_at\\_sys.bot.kyoto-u.ac.jp](mailto:fuse_at_sys.bot.kyoto-u.ac.jp)（\_at\_ を @ に置換してください）までご連絡ください。なお、当日申込も可能です。

## 【講演要旨】

「学名の読み方・綴り方—学名のあれこれ入門編」

永益 英敏（京都大学総合博物館）

学名は使っているけれど、きちんと勉強する機会はなかなかないものです。なんとなくわかっているつもりでも、実はよくわからない学名のあれこれについて解説します。学名はラテン語だということは知っていても、どのように発音すればよいのか。学名に使える文字にはどんなものがあるのか。あたりなかつたりする記号のようなものは付けるのが正しいのか。「正しい」綴りはどのように決められているのか。属名の性によって形容語が変化するパターンも含めて、学名の綴り方に関する基礎をお話します。

「ハイマツとキタゴヨウ：交雑を通じた遺伝子の種間での交換」

綿野 泰行（千葉大学大学院理学研究科）

生物の種は、自然条件下で交配を通じて遺伝子の交換を行うのか否かによって区別されます。しかし一筋縄ではいかないもので、別種と認識されている者の間でも、部分的に交雑を行い遺伝子の交換を行う例が存在します。ハイマツとキタゴヨウがその一例です。別の種が会って雑種ができる場所が帯状の場合、これを交雑帯といいます。ハイマツとキタゴヨウの交雑帯を通じた遺伝子の流れを、母性遺伝（ミトコンドリア）・父性遺伝（葉緑体）・両性遺伝（核遺伝子）の様々な分子マーカーを駆使して解析した例を紹介し、また、ハイマツの持つミトコンドリア DNA は実は、北米大陸由来であり、過去にも種間交雑の影響を受けていた可能性について述べます。

「植物の生活史研究—生命表の利用」

木下 栄一郎（金沢大学大学院自然科学研究科）

生活史とは「生物の個体が誕生し、成長・繁殖を遂げて最後に死亡するまでの一生涯のサイクル」（生態学入門第2版）のことです。生活史を記述するとき、扱う形質や方法は対象とする生物によって異なりますが、生活史をいくつかのステージに分けそれらを矢印で環状につなげることは普通に行われているようです。生命表は生存繁殖スケジュールを記述するもので、一般には行列で示されますが、生活史のステージが齢で決まる場合は表で示されることもあります。生命表は種の生活史の特徴をよく表します。同時に、生命表を用いることにより、生活史に関して思いもかけなかったことがわかることがあります。今回はいくつかの例を紹介し、

「ヒマラヤ造山運動とテンナンショウ属の分化」

邑田 仁（東京大学大学院理学系研究科）

分子系統解析に基づくテンナンショウ属の系統樹は最初 Renner et al. (2004) により発表されましたが、扱われた種数が少なく、解析領域も短いものでした。Ohi-Toma et al. (2016) による新たな系統樹は全種数の2/3ほどを扱い、解析領域を増やすことにより、系統関係をより鮮明に描き出すことができました。この系統樹と対比して、現行の節レベルの分類について解説します。また、インド・ヒマラヤ地域と中国横断山脈において異なる時期に分化が起こったことなど、テンナンショウ属の地理的分化とその時期について推定します。

「日本の水草研究はどこまで進んだか」

角野 康郎（神戸大学大学院理学研究科）

私は 1970 年代後半に水草の生態学から研究に入りました。そこで直面したのが水草の分類学的研究がたいへん遅れているという現実です。図鑑を調べてもよくわからない標本がいっぱいありました。そこから分類地理学の研究にも首を突っ込んでいきましたが、形態の変異だけでなく、フェノロジーや越冬様式などの生活史特性を踏まえて分類群を認識するアプローチを心がけました。私が研究を始めてから今日までの 40 年間は、絶滅危惧種と外来種の問題が顕在化した時代でもあり、水草では特に重要な課題となりました。このような背景のもと、日本の水草研究はどこまで進んだか、現状と課題を紹介します。

## 日本植物分類学会第 17 回大会（金沢）および 2018 年度総会のご案内

第 17 回大会会長 植田 邦彦

日本植物分類学会第 17 回大会を、2018 年 3 月 7 日から 10 日の日程で、金沢で開催いたします。皆様の参加を心からお待ちしております。

【本会場】金沢歌劇座（金沢市下本多町 6-27）

口頭発表、ポスター発表、総会、授賞式、受賞記念講演、公開シンポジウム

詳しいアクセスは下記リンクをご参照ください。

<http://www.kagekiza.gr.jp/access/>



【各種委員会会場】金沢大学角間キャンパス自然科学本館（金沢市角間町）

編集委員会、評議委員会

詳しいアクセスは下記リンクをご参照ください。

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/university/access/>

【日程】2018 年 3 月 7 日（水）～ 3 月 10 日（金）

3 月 7 日（水）	午後	各種委員会、評議委員会（金沢大学）
3 月 8 日（木）	午前	口頭発表（大会発表賞エントリー者）
	午後	口頭発表（一般）・ポスターセッション
3 月 9 日（金）	午前	口頭発表（一般）
	午後	口頭発表（一般）・総会・受賞講演
	夜	懇親会（KKR ホテル金沢）
3 月 10 日（土）	午前	口頭発表（一般）
	午後	公開シンポジウム：郷土植物学の展開についてのシンポジウムを予定しています。

【第 17 回大会ホームページ】

発表・参加登録および発表要旨登録を行うことができます。また、大会準備の進捗状況やプログラムなど、情報を随時アップロードいたします。

<http://www.e-jsps.com/jsps17/>

## 【問い合わせ先】

事務局長：小藤累美子

連絡先：日本植物分類学会第 17 回大会（金沢大会）実行委員会

〒920-1192 石川県金沢市角間町 金沢大学理工研究域自然システム学系内

TEL: 076-264-6208

E-mail: moushiko@17amjsps.com

（お問い合わせの場合には、できるだけ電子メールをお使いください）

## 【発表の要領】

## ●口頭発表

発表時間は、講演 12 分、質疑応答 3 分の計 15 分の予定です。口頭発表の際には液晶プロジェクターを使用しますが、発表用パソコンは各自でご用意ください。Apple 製品等、特殊な接続ケーブルが必要な場合は、各自でご用意ください。

パワーポイントのスライド作成にあたっては、色覚バリアフリープレゼンテーション法に関するサイト <http://cudo.jp/cbf/> を是非ご一読ください。

## ●ポスター

ポスター用ボードは、縦 180 cm x 横 90 cm のサイズです。貼り付け用の鋏などは、大会実行委員会でご用意いたします。ポスターは、3 月 8 日 13 時までには貼り付けし、9 日 18 時までには撤去してください。

## 【発表・参加申込方法】

大会には日本植物分類学会会員・非会員を問わずにご参加いただけますが、口頭およびポスターの演者（実際に発表する方）は、特に依頼した場合を除き、会員に限ります。非会員の演者（実際に発表する方）は、申込と同時に日本植物分類学会への入会手続きをお願いします。次のどちらかの方法で、発表・参加申込を行ってください。

## 1) 大会ホームページからの申込

第 17 回大会ホームページ（<http://www.e-jsps.com/jsps17/>）から、「発表・参加登録」に進み、発表・参加登録を行ってください。発表・参加を登録してから 1 日経っても受付の連絡メールが届かない場合は、メールの件名を「学会申込確認（参加者氏名）」とし、moushiko@17amjsps.com までご連絡ください。

## 2) 郵送による申込

インターネットを利用できない方は、本ニュースレター案内の 9 ページに記載されている「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、下記まで郵送にてお送りください。その際には、締切日必着といたします。発表・参加申込のファックスによる送付は受け付けません。

郵送先：〒920-1192 石川県金沢市角間町 金沢大学理工研究域自然システム学系内  
日本植物分類学会第 17 回大会（金沢大会）実行委員会 宛

## 【大会参加・発表申込の締切】

1) 演者（実際に発表する方）：発表・参加申込 / 大会・懇親会参加費、弁当代等振込

1 月 19 日（金）必着

2) 演者以外：参加申込 / 大会・懇親会参加費、弁当代等振込

2 月 2 日（金）必着

2 月 3 日（土）以降は大会・懇親会参加費が増額されますので、なるべくお早めにお申し込みください。また、2 月 3 日（土）以降は振込まず、当日参加をご利用ください。

## 【大会発表賞へのエントリー】

大会発表賞へのエントリーは、日本植物分類学会の会員で、パーマナント・ポストについていない研究者（年齢制限はありません）で、筆頭発表者かつ演者（実際に発表する方）本人に限ります。次のどちらかの方法で、エントリーを行ってください。

## 1) 大会ホームページからのエントリー

発表・参加登録ページにある「発表賞」にチェックを入れてください。

## 2) 郵送でのエントリー

発表・参加申込書「8. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー」の項目で、「(1) する」を選択してください。

## 【発表要旨】

第17回大会ホームページ (<http://www.e-jsps.com/jsps17/>) から、「発表要旨登録」に進み、発表要旨登録を行ってください。要旨の登録は、演者（実際に発表する方）が行ってください。発表要旨を登録してから1日経っても受付の連絡メールが届かない場合は、メールの件名を「発表要旨登録確認（登録者氏名）」とし、[abst@17amjsps.com](mailto:abst@17amjsps.com) までご連絡ください。

発表要旨の本文は最大650字までとし、発表要旨に図表は使用できません。なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。大会ホームページからの要旨登録が困難な方は、大会実行委員会までお早めにご相談ください。

## 【発表要旨登録の締切】

1月26日（金）24:00（日付が27日になって以降の登録は、受け付けません）。

## 【参加費】

## ●大会参加費（発表要旨集1冊代金を含む）

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1) 事前申込（2月2日（金）までの振込） | 一般4,000円，学生2,000円 |
| 2) 当日参加申込             | 一般5,000円，学生3,000円 |

## ●懇親会参加費：

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1) 事前申込（2月2日（金）までの振込） | 一般7,000円，学生4,000円 |
| 2) 当日参加申込             | 一般8,000円，学生5,000円 |

## ●3月8日（木）、3月9日（金）の昼食弁当代 各1,000円

## 【参加費送金先】

郵便振替口座番号：00760-1-70111

口座名義：日本植物分類学会第17回大会実行委員会

同封（または郵便局備え付け）の振込用紙にて、振込金額の内訳（大会参加費、懇親会参加費、弁当代〔注文する日付を明記〕等）を通信欄に必ず記入の上、ご送金ください（振込手数料はご自身でご負担ください）。また、振込者と参加者は同一にしてください。参加申込の際に、振込日と振込郵便局をご記入いただきますので、振込を終わってから参加申込を行ってください。

## 【懇親会】

KKRホテル金沢（金沢市大手2-32；<http://kkshotelkanazawa.gr.jp/>）で行います。本会場から徒歩約20分です。

## 【昼食】

予約制で、春らしい弁当を用意いたします。事前申込の際に一緒にお申込みください。また、本会場周辺には飲食店、コンビニエンスストアなどがあります。

## ■大会参加の各締切

区分	項目	締切
発表する人 (演者)	大会参加費 / 懇親会 / 昼食弁当代の振込 一般 4,000 円 / 7,000 円 / 1,000 円 学生 2,000 円 / 4,000 円 / 1,000 円	発表申込より前
	発表・参加登録 大会ホームページから	1月19日(金)
	発表要旨登録 大会ホームページから	1月26日(金)
参加する人 (演者でない共同発表者を含む)	大会参加費 / 懇親会 / 昼食弁当代の振込 一般 4,000 円 / 7,000 円 / 1,000 円 学生 2,000 円 / 4,000 円 / 1,000 円	参加申込より前
	参加登録 大会ホームページから	2月2日(金)
当日参加の人 (2月3日以降は当日参加をご利用ください)	会場受付で参加申込・支払 大会参加費 / 懇親会 一般 5,000 円 / 8,000 円 学生 3,000 円 / 5,000 円	

## 【宿泊施設】

宿泊に関しては各自でご予約ください。市内の宿泊施設が込み合うことが予想されますので、お早めのご予約をお勧めいたします。本会場、懇親会場、繁華街へは、香林坊・片町周辺または金沢駅東口周辺が便利です。金沢駅東口から、本会場等のある香林坊・片町周辺までは、徒歩 40 分、バスで 15 分程度です。

## 【託児について】

現時点で託児室の開設は予定しておりませんが、ご希望の場合は、12 月末日までに大会実行委員会までご相談ください。希望者多数の場合は、開設を検討いたします。また、近隣の託児施設のリンクを、大会ホームページに掲載いたしますので、ご参照ください。

## 【公開シンポジウム】

郷土植物学の発展に関する講演数題を予定しております。一般公開で、参加無料です。詳細は大会ホームページや次号ニュースレターでお知らせいたします。

## 【大会会場へのアクセス】

## 1) 本会場（金沢歌劇座）

金沢駅東口から、北鉄バスで 15～20 分。91～95 系統で「広坂・21 世紀美術館」バス停下車、徒歩 5 分。18, 19 系統で「本多町」バス停下車、徒歩 1 分。城下まち金沢周遊バスや兼六園シャトルの金沢駅東口始発は午前 8 時 30 分以降ですので、ご注意ください。その他、13, 14 系統もご利用になれますが、本数は多くありません。

## 2) 各種委員会会場（金沢大学自然科学本館）

10 ページにつづく



## 日本植物分類学会第 17 回大会「発表・参加申込書」

必要事項をご記入の上、ニュースレターに記載の宛先まで郵送してください。  
発表の申込締切は 2017 年 1 月 19 日（金）です。

1. 氏名（ふりがな、またはローマ字）：
2. 所属：
3. 所属の短縮表記：
4. 連絡先住所：〒
5. Tel & Fax:
6. E-mail アドレス：
7. 研究発表
  - する：(1) 口頭発表 (2) ポスター発表 (3) どちらでも良い
  - しない：(4) 発表しない (5) 共同研究者が発表する（実際に発表する方の氏名：\_\_\_\_\_）
8. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー：(1) する (2) しない
9. 発表タイトル：
10. 全発表者氏名・所属（実際に発表する方の氏名の右肩に\*印）：
11. 全発表者氏名のローマ字表記：
12. 現在求職中の表示の希望：(1) 希望する (2) 希望しない
13. 大会参加費（振込は 2 月 2 日まで。それ以降は当日参加扱いとなります）： \_\_\_\_\_ 円  
 一般 4,000 円 学生 2,000 円
14. 懇親会：(1) 参加する (2) 参加しない
15. 懇親会費（振込は 2 月 2 日まで。それ以降は当日参加扱いとなります）： \_\_\_\_\_ 円  
 一般 7,000 円 学生 4,000 円
16. 昼食弁当：(1) 3 月 8 日（木）のみ 1,000 円 (2) 3 月 9 日（金）のみ 1,000 円  
 (3) 両日 2,000 円 (4) 申し込まない
17. 13, 15, 16 の合計金額： \_\_\_\_\_ 円
18. 振込郵便局名：
19. 振込日： \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日  
 郵便振替口座番号：00760-1-70111  
 口座名義：日本植物分類学会第 17 回大会実行委員会

## 2) 各種委員会会場（金沢大学自然科学本館）（8 ページの続き）

金沢駅東口から北鉄バス 91, 94, 93, 97 系統で「金沢大学自然研前」下車（約 35 分）、徒歩 5 分。

- ・バスの時刻などについては、北鉄バスの Web サイト (<http://www.hoktetsu.co.jp/>) をご参照ください。
- ・各種委員会会場には、駐車スペースを確保しておりません。また、本会場周辺には公共駐車場がありますが、大変混雑します。できるだけ公共交通機関をご利用ください。

## 書評

## 日本産ジュラ紀の植物化石図鑑—来馬型植物群—

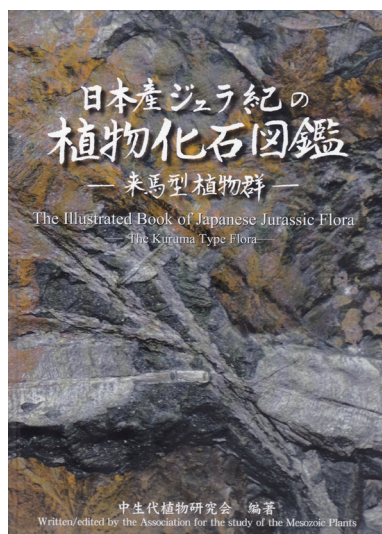
中生代植物研究会（会長 寺田和雄） / 編著 中生代植物研究会  
/ 発行 定価：2,000 円（税込・送料込） A4 判 124 ページ

ジュラ紀というと映画「ジュラシックパーク」を思い出す人も多いだろうが、まさしく恐竜が闊歩していた時代の植物を、化石をもとに解説したのが本書である。評者もよく知らなかったが、来馬（くるま）型植物群は現在の富山・新潟・長野 3 県にまたがる地域から多くの化石が発掘された植物のことである。これらジュラ紀前期の植物を紹介している。化石、とくに鋳型として残った印象化石は専門家以外にはわかりにくいものだが、化石をもとに忠実に描いた線画を添えてどのような化石なのかわかりやすくしている。化石はトクサ目、リュウビンタイ目、ゼンマイ目、ウラジロ目、ヘゴ目などのシダ植物、シダ種子類<sup>†</sup>、ベネチテス目<sup>†</sup>、ソテツ目、テニオプテリス属<sup>†</sup>、イチョウ目、チェカノウスキア目<sup>†</sup>、マツ目の裸子植物に分けられている。そのうち<sup>†</sup>印のついたものは絶滅してしまった群であり、現存する目でも絶滅したものが多く含まれている。

図鑑の最後がマツ目で、マツで終わったのに一種の違和感を覚えたが、それは誤解だった。この本には被子植物が扱われていなかったからであるが、それが進化する前の古いジュラ紀の植物についての本だからである。現存するイチョウ目といっても、葉が二裂する *Ginkgo biloba* とは似ても似つかぬ格好をしている。ジュラ紀と現生の植物の違いから 2 億年近い長い間に進化を遂げたことがわかり、ジュラ紀の後に被子植物が現れたことを改めて実感する。

本書は中生代の植物化石についての日本語の図鑑として書かれ、構想から 5 年かけて出版された。化石が多く収蔵されている小松市立博物館（石川県）の化石を中心に個人が所有する化石も加えた資料を基にしており、地域博物館の意義も伝わってくる。本書出版の狙いは、序論に位置付けられる「次世代の日本の古植物研究者へ」というメッセージと「あとがき」に込められている。日本の古植物学が絶滅の危機にあると認識して（植物分類学も他人ごととは言えない）、その状況を少しでも打開するために出版したという。本書は少しなりとももうけようとするつもりはさらさらなく、言うならば自費出版である（「花博財団」から助成金を得ているが、財団に評者からも敬意を表したい）。学界の現状が少しでも改善してほしいという願いを込めて、収益は本書を寄贈する送料に使うという（売値は 2,000 円と極めて良心的）。日本の植物多様性の歴史を知りたい方ばかりでなく、古植物学研究の発展を期待されている方にぜひ読んでいただきたい。近況では、非常に好評で売れ行きは上々とのこと。

古植物学の現状を打開することは容易なことではないであろう。古植物学の宿命は、進化の直接の証拠とはいえず断片的な化石を扱っているため、「タコつぼ研究」と揶揄される他の分野もあるように、研究



が断片的な記載に頼らざるを得ないかもしれない。そのような断片性を排除して、他とのつながりを強化することが一策であろう。化石が葉の断片ならば、個体像を復元する、環境とのかかわりを示す、進化の歴史的つながりを明らかにする、現生植物と関係づける、分子と結びつけるなど、全方面で結びつきが深い分野に育てるのはどうであろうか。そうすることで、他分野からも必要とされるようになるかもしれない。私事ながら、評者はマトニア科のシダを研究した時、形の不思議さにひかれたものである。今にして思えばその不思議さは長い進化によるものだったのだが、古植物学とのコラボがあればもっと深い研究ができたことであろうと悔やむ。

なお、お買い求めは中生代植物研究会・寺田和雄氏 (info@tyushokukai.net) まで。

(元国立科学博物館植物研究部 加藤 雅啓)

## 水辺の樹木誌

崎尾均 / 著 東京大学出版会 / 発行 ISBN : 978-4-13-060235-8  
定価 : 4,400 円 + 税 A5 判 260 ページ

前に植物分類学会講演会でお話しいただき、また佐渡島での野外研修会でお世話いただいた新潟大学農学部の崎尾均さんが、そのライフワークとして取り組んできた水辺林という生態的に特異的な環境に成立する林とそこに生育する樹木達の本を出版した。

そもそもタイトルにある水辺林とはどのようなものなのか。第1章では水辺林に上流から下流に向かい溪畔林、山地河畔林、河畔林、湿地林、マングローブ林といった種類があることや、その攪乱の程度・地形・光環境などの生態環境の特性が説明されている。第2章では各種の水辺林に生育するシオジ、サワグルミなど20種を超える樹種を取り上げ、その水辺環境に適応した生活史や繁殖様式、生育特性などの多様性について自ら解明してきた研究を中心に紹介している。

水辺林に生育する樹木達は10年ほどの短期間、100年ほどの長期間のそれぞれの攪乱にうまく適応して定着し林分を形成している。何気なく通りすぎる渓谷でこのような形で多様性に富んだ林が形成されていることは驚きである。第3章では各種の水辺林の主要構成樹種にみられる種間関係を紹介し、第4章では水辺林での攪乱、特に災害などでの大規模攪乱からの再生がどのように進展していくのか紹介がされている。さらに第5章では水辺林での帰化植物特に「侵略的外来種」を取り上げ、その分布拡大は水辺林環境においても駆除が難しくやっかいな問題となっている現状を説明している。その具体例としてハリエンジュ、ナンキンハゼの生態的特性を紹介し、どのような施策がその定着防御に適するのか、その研究例を紹介している。第6章では水辺林の保護と再生といった保全への具体的な各地での取り組みについて紹介している。水辺林環境を次世代に残していこうとする保全方法には研究成果を踏まえ、市民理解や協力体制作りを経てさまざまな解決法を試みる必要があることが理解できた。

水辺環境そのものは分類学的には溪流沿い植物に見られるように、特異的な種分化を引き起こす環境となっている。ここに生育する樹木達を理解するための教科書としても本書は最適である。そもそもこのような研究は寿命の長い植物においては数年程度ではなかなかデータが得られず、かなり長期的視野にたって継続的に研究を続けていかなければならない。今の時代の研究環境ではこのような持続は厳しい中で、崎尾均さんは一貫して水辺林の樹木達の研究を続けてきた。その意味でも他に例を見ない力作の書物である。

(大阪教育大学 岡崎 純子)



